

2. 神化思想における〈ことば〉の役割の相違

筆者が第2に思ったのは、「神化における〈ことば〉の役割が東方と西方とでは根本的に異なる」ということである。

東方神学の起源をなすディオニュシオス・アレオパギテース『神名論』においては、「神にいかなる名をつけることがふさわしいか」という神に対する述語づけの問題が論じられたが、これらは「神への讚美 *ύμνεϊν*」として捉えられていた（『神秘神学』c. 3, 1032d-1033c）。つまり人間は「神は存在である。神は愛である。……」といった〈讚美のことば〉を発することによって「全宇宙の神化」に与り、自らも神化して行くのである。（この伝統は現在に至るまで続いており、私がギリシアを旅行した時にガイドとなってくれたテサロニキ神学校の教授は旅行の間中、絶えず讚美歌を口ずさみ続けていた。）

他方、西方においては、〈ことば〉は、ボエティウスによるアリストテレス論理学の中世への伝達、ペトルス・ロンバルドゥスによる『命題集』の執筆、アベラールによる *Sic et Non* の執筆、アルベルトゥス・マグヌスによる神学への弁証論 *dialectica* の導入などに見られるように、主に「論理学」という形で「神」の問題に関わって来たように思われる。確かに、トマス・アキナスは、東方神学の精華である『神名論』の注解を書いているが、トマスが東方神学の「神への述語づけは神への讚美である」という伝統を十分な形で西方に伝えたかについては疑わしい面もあり、これについては改めて研究されるべき問題であろう。

〈意見〉

桑原直己

筆者は、当日シンポジウムの中で鶴岡氏に対し、氏は「恋愛詩+自註」形式の著作に焦点を当て、婚姻神秘主義の色彩の強いアビラのテレサに由来する素材についての示唆を見ておられるが、『カルメル山登攀』『暗夜』のような「理論的」著作についてもその点は一貫していると考えるか、という趣旨の質問をした。

ここで筆者がこのような質問をした背景について簡単に補足しておきたい。「神秘主義」の歴史において、「婚姻神秘主義」と「本質神秘主義」と

いう二つの概念はよく用いられている。婚姻神秘主義とは、『雅歌』に由来する人間的な愛情や婚姻についての語彙のもと、自らの魂を花嫁、神ないしはキリストを花婿となぞらえ、神に向かう魂の愛を表現する霊性の伝統である。他方、本質神秘主義はアウグスティヌスから受け継いだ「範型論」の思想にもとづき、精神の内面に向かう内向的な探求によって、神の似姿としての自己を知り、神との類似を回復することを志向する。ただし、本質神秘主義は結局徹底した離脱を条件として人間が神の本質と合一することを主張する。

ビンゲンのヒルデガルト以来、女性の神秘家たちの間では一般に婚姻神秘主義が支配的であったが、ヴァンダルブルークによればハデウエイヒ、マグデブルクのメヒティルト、ポレートといったベギンないしベギンと縁の深い女性神秘家たちの中に本質神秘主義への萌芽的要素が見られ、それが「本質神秘主義の大成者」であるエックハルトに素材を提供した、という。他方、近代初頭のカルメル会を代表する二人の神秘家についてコニエが記すところによれば、アビラのテレサは本質神秘主義への傾向とは無縁であったのに対して、十字架のヨハネにおいてはエックハルト的な、つまり本質神秘主義的な傾向が強くみられる、という。そして十字架のヨハネにおけるそうした傾向を指摘する際にコニエが引証するのは『カルメル山登攀』『暗夜』のような「理論的」著作であった。それゆえに、「恋愛詩＋自註」形式の著作に鶴岡氏が見るアビラのテレサ起源の思想と、本質神秘主義的傾向を強く示す『カルメル山登攀』『暗夜』のような著作との間の連続性について質問した次第である。

おそらく鶴岡氏は、十字架のヨハネの思想は「婚姻神秘主義」対「本質神秘主義」といった図式で割り切れるものではない——いわば両者が統合されたものだ——というお立場であるものと想像する。だとすれば、「恋愛詩＋自註」形式の著作における「エックハルト的な要素」をどう見るか——そうした要素があるのか、無いのか、あるとしたらどういう形であり、今回の提題で鶴岡氏が光を当てたアビラのテレサ起源の思想といかに関係するのか——という形で質問を問いなおすことも可能かもしれない。